



WORLD NOW No.67

# 草創期のIMF・JIC 国際活動 思い起こ す先達の情熱とロマン

## IMF・JICの結 成前夜

“問わず語り”を気取るわけではありませんが、草創期のIMF・JIC国際活動を顧みるとき、あらかじめ触れておきたいことがあります。それはIMF・JIC結成前の一時期、日本労組が取り組んでいた国際交流の様相についてです。

ごく手短かに言えば、総評系、中立労連系の単産はどちらかと言つて、連東欧（今では中東欧）または中国など、社会主義国労組との交流に傾斜していました。言わずもがなその交流内容はイデオロギー中心に反体制への意志固めといった趣があり、一般的には“平和のために乾杯”して帰国するというのが、乾杯招待外交と揶揄されたものでした。

一方、同盟系、純中立系の単産は、欧米など西側労組との交流が中心で、

特に米国労組との交流は米国務省/米大使館のルートによる招待交流が際立ちましたから、“ケネディ/ライシャワー路線”、“帝国主義路線”などと隘口を叩かれてもいたように記憶します。

つまり、世界労連（WFTU）と国際自由労連（ICFTU）という二大勢力による日本労組取り込みの競争があつて、日本は“草刈り場”などの風評もあつたのです。

そのようなときに、IMF・JICという、外部から見れば“得体の知れない怪物”が登場したのですから、両陣営が身構えもし、注視していたのは無理からぬことだつたのでしよう。結成のいきさつは別としても、JICは“国際交流の窓口”という位置づけをされたもので、それがJIC結成の主導派と反対派との間の“妥協のための産物”だと判つていても、そしてIMFという国際組織への加盟チャネルとまでは理解されていたものの、では肝

### IMF・JIC顧問 小島正剛 こじま・せいごう

60年IMF日本事務所に入職以来、JIC国際局長、JIC事務局長代理、JIC国際委員長（副議長）、IMF地域代表を務めるなど国際労働運動一筋。98年JIC顧問に。他に現在、自動車総連国際顧問。日本労働ペンクラブ会員他。主要著書「海外労働アラカルト」他。



国労会館にあつた事務所には海外から多くのIMFの仲間が訪れた。



心の「国際交流」とはどのようなものであるかについては、不透明ではなかったかと思えるのです。それが単なる平和乾杯外交や対米一辺倒でないことだけは確かだった、といふことでしょうかね。

JIC結成の64年は、日本のIMF（国際通貨基金）八条国への移行やOECD加盟承認のなつた年です。それを予見していた金属産業の産別は、近く開放経済体制に適切に対応する必要性に迫られていました。そのためのソーシャル・マシーンとしてのJIC結成でもあつたと理解しています。それは乾杯外交や招待外交がすでに過去に追いやられる前兆だった、と言えるでしょうね。具体的には、IMFという国際連帯組織を軸の一つとして、欧米並みの賃金・労働条件を達成しようとするビジョンがありましたよ。つまりかつて欧米からソーシャル・ダンピングのそしりを受けた歴史を念頭に、「公正貿易」なくしては日本が生き延びる道はないとする認識は、すでにJIC構想に包摂されていたのですね。

## 国際連帯の拠点

余談かも知れませんが、その64年のIMF JIC発足の当初、事務局は総評の主力単産の一つ、国鉄労組の労働会館（通称「国労会館」東京・八重洲）に開設されました。といふのは、57年以来対日オランダの拠点だったIMF日

本事務所が国労会館の3階にあつたからという単純な理由ですね。

その日本事務所たるや、うなぎの寝床のような事務所スペースでして、私など60年入職の新参者は、朝出勤するとまず軽く水をまき、モップで床掃除をすることから始めたものです。養成工でしたね。お隣には国際運輸労連（ITF）の事務所があつて、山崎剛さんが所長でした。同じ国際産業別書記局（ITS）のよしみでIMF日本事務所開設にも協力していただいたと聞いています。のちに国際局においてになった樋口恵美子さんは、その当時ITFにおられました。そこを拠点



鉄鋼労連第29回大会でIGメタルとUSWAの海外来賓の通訳をする小島氏（64.9.）

に7年にわたる瀬戸一郎氏を中心とするオルグ活動があつたのですね。

そして、新生IMF JICの事務局は同ビルの7階に開設されました。小規模ながら常任幹事を開くスペースも持つていましたから、200平米くらいはあつたのでしよう。IMF日本事務所もこれを機に7階に上がり、同居というよりはIMF日本事務所がそのままJIC事務局を担当する趣でした。JICプロパーのスタッフはまだ採用されず、瀬戸事務局長（IMF日本事務所長）のほか二人の日本事務所スタッフが兼務したのです。

当初、ロジスティクスの面では貧弱でしたね。JIC用の電話機など一台しかなかったし、コピー機もコピー液の強烈に匂う不快なものも一台かな？ そついつた案配でしたよ。ただ英文タイプライターだけはオリベッティ製の良いのが二台あつた。これはもちろんIMF日本事務所の備品。

そつ言えば、ポータブルの仮名タイプが市場に出て、一台買入れましたね。福岡議長が自らそれを使って常任幹事会の資料づくりをやられていた姿を思い起こしますね。結局読みづらいと不評で長続きはしませんでしたかね（笑）。でも新組織を育てようとする議長の情報には感じ入りました。

国労会館前の外堀通りをはさんだ真向かいの三徳八重洲ビルに移転したのは68年の11月でした

かね。しばらくしてテレックスの時代が来ました。瀬戸事務局長の鋭いビジネスマン・センスからすれば、すぐにでもテレックスを導入したかった。でも常任幹事の中には、時期尚早だとか、我が産別にもまだ無いとか、組合が持つのは贅沢なのではないか、などと主張する向きもありましたね。すぐにとつわけにはいかなかった。国際担当スタッフとしてはまことに歯がゆかったですね。どうにかOKが出ました。

事務局長が早速ジュネーブのレフハンIMF書記長に向けて、JICとしてテレックスを導入した旨の報を送ると、来ましたよ返事が。たつた一言、「20世紀によつこそ」とあつた。一同苦笑しましたね。これが受信第一号。その後、テレックスは国際通信に大活躍を始めます。

とにかく、IMF JICの国際活動はIMF日本事務所と一体化してしました。良く言えば、相互補完の関係でしょうが。機能を分けて本来あるべき姿に戻したのは90年代半ばだったでしょう。

## 国際連帯の先駆

草創期に想いをいたすとき、特に印象に残っているのは、結成に先立つ57年、つまりIMF日本事務所の開設された年ですが、鉄鋼労連の激しい闘争に向けて、IMFから1万スイスフラン（84万円）もの資金カンパが送られ

今昔のがたり



てきたことです。当時としては破格の額でした。国際組織の展開する連帯行動の何であるか、その一端が示されたのです。その後、59年に全米鉄鋼労組（USWA）の長期ストが116日間にわたって全米を震撼させました。IMF中央委員会はその支持を決議し連帯行動をとります。その情報はIMF日本事務所を通じて日本に伝わり、鉄鋼労連はその時100万円の資金をUSWAに送って、まだ見ぬ仲間たちに連帯の精神を示したのです。日米鉄鋼労組の自前の交流、連帯関係はこれによって始まりました。後に、JCGが日米加金属労組会議を立ち上げますが、その後でこの絆がものを言ったといえるでしょう。

## 障害越えて生き生きと船出

IMFやその主要な各国加盟組合の動向は、当初『国際金属労連（IMF）ニュース誌』を引き継いだ『IMF日本協議会』誌によって報道され、各方面の関心を集めました。当時としてはユニークでしたからね。翻訳はほとんど内部で消化しました。

IMF諸会議への代表派遣には困難が伴いました。ひとつは人選と、その

代表発言をどうするかです。JCG常任幹事会はJCG結成の由来を大事にしたのです。確かに、窓口の役割を生かしました。日本を代表する公式発言は各産別がバラバラにやるのではなく、事務局が中心になって策定、一本化し、自由討議の際には出席代表の個人的見解として発言するとの不文律が、短時間のうちに仕上がったのです。IMFへのJCG一括加盟方式のメリットという点でしよ。

別の問題は言葉の障害でした。JCGのIMF加盟条件の一つとして、日本語を公用語として加えることをIMF本部に認めてもらったのは快挙でした。IMF諸会議に関する限りはともかく大きな心配はなかったように思います。問題は視察団や調査団の海外派遣時の通訳サービスでした。訪問先に必ずしも信頼できる通訳さんがないのです。

結局日本から随行させよというところで、私なども定期的に欧米やアジア諸国を巡回する機会を多く得ました。生きた組織の勉強、社会情勢の変化など、繰り返し訪問で年次ごとに把握し続けることができたのは幸いでした。その後の情勢分析に大いに役立ちました。

労働事情視察団の派遣は恒例となりましたが、数年を終りして議論になりました。つまり、団員の中には、調査目的に沿ったスケジュールを求める

勉強派グループと、組合の論功行賞で参加してくるリタイア前のグループとの間に目に見えない亀裂が生じるケースが出てきたのです。後者は、むしろ自由時間や、視察に比重を置きがちなのです。（笑）外貨事情もあって当時海外に出る機会が、ごく限られていました。今は多分、自前でできる時代ですから、それほど問題にならないかな。

そう言えば、あまりにしばしば視察団や調査団が訪問してくるので、少し遠慮してほしいという連絡を現地労組から受けたことがありますね。JCGを通じてではありませんが、各産別が独自に団を派遣するようになり、よその産業の労組まで要請してきたりして、学者の方も訪問先への紹介状を要請してくる。しまいに肝心のJCG本隊が訪問を遠慮するなどということもあつたりしましたよ。（笑）結局、割り切った対応をせざるを得ませんでした。IMF会議などで、受入れてくれる組合の国際担当には、顔を合わせたくなかつたですねえ（笑）。会ったとき、ぼくを殺したいだろうと言ったら、笑い飛ばされましたがね。

言葉の障害は海外代表の受入れにあたって、原則は自前で行ったのですが、やはり、頭痛の種でした。特にJCG結成と同時にスタートした国際労働セミナー（当時は国際資金セミナー）の通訳には悩みました。



第3回国際資金セミナーでキャロル・A・E・U会長の通訳をする小島氏（66歳）

その第一回の時、講師は忘れもしないドイツ金属労組（IGM）賃金担当のフリッツ・ハウザーさんでした。さあドイツ人です。英語もできる専門家でした。賃金問題に詳しい通訳を捜したのですが果たせません。そこで某大学のドイツ語教授に依頼した。会場は熱海の日本旅館（水葉亭）で、百畳敷の大広間でした。教授が疲れてくると、私が英語で交代して続けたものです。そうこうするうちに、洋服屋の制度、という訳語が教授の口を吐いて出たのです。講義のメモなどをとっていた受講者が一様に不思議そうに反応をしました。金属のゼミで洋服屋さんに講義を中断した。ちよとドイツから戻った私は、すぐにこのいきさつ



を知りました。洋服屋の制度とは、テラー・システムのことだったのですね(笑)。一日三日あぐらで座りっぱなしは皆さん大変で、三日目には受講者はかりか先生や通訳まで寝そべって続けましたね(笑)。

この種の話には事欠きませんでした。百年以上も前の1891年、ブラッセルで開いた社会主義インターナショナルの会議の折に、金属の労組代表が別途会議を持つてですね、国際金属情報センター(後のIMF)の設置を決めたのですが、その時に生じた言葉の障害のことをよく思い出しましたよ。その時は、カール・マルクスの未婚エリノアが通訳を手伝ってくれて事なきを得た。今はJCにもエリノアさんが何人かおられるでしょう。

資料の翻訳も大変でしたが、やり甲斐はありました。各産別としても欧米の最新情報を速やかに手にしたいわけですからねえ。はじめはもっぱら日本事務所の手掛けていたのですが、次第に外部の手を借りるほどに分量が増えていったのです。特にお世話をかけたのは、元国際石油化学労連(IFPCW)事務所長の松本博さん(後にJC嘱託)でした。実は私の入職時、この方が試験官の一人でした。ひよっとするとあえて人選を間違ってくれたのかも知れません。忘れがたい人の一人です。

彼と、瀬戸事務局長と、助手として

IMF米國加盟労組と交流するJC米國労働事情視察団(67.11)



の私も加わった3人で、都内のホテル・ニューオータニ付近の日本旅館(京稲)に夏の一時期泊まり込んで大作『IMF75年の歩み1893~1968年』(フリッツ・オベル、1968年)日本語版の校正を仕上げるべく作業したことを鮮烈に思い出さすことができます。冷房などない時代にタオルをかけて汗を拭き拭きね。このときも畳部屋でしたっけ。国際連帯分野で想い起すのは、69年夏に発生した韓国金属労連(FKMTU)の長期造船ストへの支援活動です。この年9月の第8回IMFJC総会に出席した李副委員長の要請を受けてその場で満場一致、ただちに支援カンパを送る緊急決議をしていますが、ストの指導者は釜山支部を率いた朴仁相(パク・インサン)さんで、後にFKMTU委員長、韓国労総(FKITU)委員長を歴任されて、国会議員を最後に退任されました。スト中、造船所の電源室に入り込んで電線を身体に巻き付けて、スイッチ・レバー片手に頑強な使用者側に対抗したというので、私もこれは、と舌を巻いたものです。引き続き、FKMTUへのオルグや労働講座に瀬戸事務局長はじめJCから人材を何人が派遣して、組織の拡大・強化に協力させてもらいました。官憲にいらまれたことなど思い出しませぬ。特に北との関係がありましたからね。

### ささやかな体験

個人的な体験でお話してもよいと思われるものを一寸紹介してみましようか。

タイのオルグに出かけ、バンコク郊外の開拓途上の工業団地を訪問したときのことです。夜になっての帰路、電灯もない畑の真ん中の狭い道路を進んでいると、突然後方から我々の小型トラックを振り払う勢いで暴走してきた大型トラック

クがありました。思わず身を洗めると無事やり過ごした運転席のフリーチャーさん(後のIMFタイ協議会事務局長)が「気をつけて。あの会社の回し者の可能性がある」となど声を殺して言った場面を思い出します。われわれを乗せた車は、畑につんのめってしまい、動きが取れませんでした。

十数年後、彼の補佐役が交渉の打合せを終えてバンコク郊外のコーヒショップから出てきたところを射殺されました。後日、フリーチャーさん自身も難を逃れるべく某寺院に2カ月以上身を隠しました。のちのIMF東アジア地域事務所の畑恒夫さんに、彼のコンタクトをとりに密かに現地に向かいもつたこともありました。

日本の労組から初めて来たと言われ驚いたアパルトヘイト時代の南アフリカも、危険地帯でした。ヨハネスブルグ近郊で組合集会に出るなどしていると、一日中、警察の小型パトカーが巧妙に追跡してくるのです。IMF本部からの同行者は、「これならスリやカッパライにやられる心配はない」などこつそぶいて見せました。実は身の危険を感じていたのです。

この種のお話も切りがありません。そのうち、何かの形にまとめておくのもいいかも知れませぬ。読む方は信じられないとの思いを持って、時代は変わったと安堵されるのでしょつか。

(2004年8月23日記)

今昔のがたり